Ozの魔法使いと剣士と脚本家と

めがね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｏｚの魔法使いと剣士と脚本家と

【Ｎコード】
Ｎ７８６７Ｘ

【作者名】
めがね

【あらすじ】
突然女体化した相棒と普段通りの生活を過ごす日常系ほのぼの物語。
であれば良かったんだけど、現実は非日常のイレギュラーばかり。
女体化の影響で一気に弱くなってしまった姫君をお守りする騎士な俺カッケーーーー！
挫折もあるけど、ひたむきにがんばります？

俺とあいつと縞模様と（前書き）

処女作です。至らぬ点あるかと思いますが、生暖かい目で見ていただけると嬉しいです。
色々とわからない事だらけなので、助けて下さいね（上目遣い）

俺とあいつと縞模様と

明け方
俺は突然の叫び声で目を覚ました
それが俺達を、
世界中の人間を巻き込んだ大事件になるとは
誰が予想できたのであろうか

「きゃぁぁぁあああああああああああっ！」
２段ベッドの２階部分から飛び出すと、薄暗い部屋の中には連れの姿が。
なぜそこにいるのかと普段なら思うだろうが、なんせ頭が働かなかった。
彼に部屋に残るように促し、廊下から出ようとしたその時、腕を掴まれた。
「今の・・・俺なんだ」
だが、今の声は女の声・・・
振り返った俺は彼、アリカにあるはずのない２つの丘（Bカップ）を見つけたのであった。

ふぅ・・・
悲鳴で集まってきた他の宿泊者や店主に頭を下げその場を収め、一息つくことができた。
すでに時計の針は５時３０分を回っている。
時間がないが、考えなければならないことが山ほどある。
まずは宿の問題だ。

俺たちは男2人でここに泊まった。それなのに別の人がいるとなると、もう一人分の料金を払わなければならないし、社会的にもマズい。

んー・・・どうしたもんか。

部屋の前で考えていると、扉が内側から開く。

「ば、馬鹿っ！お前は部屋にはいってr」

そこには大きめのローブを着たアリカが。

「これならわからないっしょ☆彡」

お前なぁ・・・むしろ怪しまれるだろうが。

「とにかく部屋に入ってろ。俺が何とかするから」

「そうは言っても、まだ仕事残ってるしさ。早く出たほうがいいだろ。」

それはそうだけど・・・さすがに豹柄はないと思うぞ。うん。

「しょうがないだろっ！これしか手持ちがなかったんだから！」

む。心を読まれた。

「と、とにかく先に出たことにしておくから。余計なことはしなくていい」

近くにだれもいないことを確認し、扉を閉める。

「そうだな・・・そこの窓から出られるか？」

わかった。と短く返事をしたアリカは少し高いところにある窓へよじ登る。

待て。とりあえずその趣味の悪いローブを脱げ。

そう言おうとしたその時、ローブに水色と白の縞模様（ボーダー）が浮かびあがった。

「お、お前！ズボンぐらい履け！」

おもいっきり蹴られた顔面をさすりながら宿を後にし、路地裏でアリカと合流。

あのダサいローブとはお別れできたのだが、身長の縮んだアリカ

は今までの服が入るはずもなく、大きめのワイシャツ1枚という挑発的な服装になってしまっていた。
落ち着け俺・・・こいつは男だ・・・
必死に息子を抑えつけ、まずは状況の整理だ。
しかしアレだな。下着はどこから出てきたんだろうか。当然俺は女性用は持ち歩いてないし、アリカもそんな趣味は・・・まさかな。

「なぁなぁ♪これから仕事だろ～早く行こうぜ」
俺の思考回路は完全にシャットアウトされ、血液が集まってくる。
「お、お前腕組むな！」
「いいじゃんか～原因はどうでも、こんな体験できないわけだし。楽しもうぜ☆」

俺は誘惑に耐え、仕事を終えることはできるんだろうか・・・

本部に行ったら元に戻れるだろう。
そんなことを思っていた時期が俺にもありました。

俺とｏｚと大切なことと

アリカのやつ・・・
調子に乗りやがって・・・楽しんでる場合か？
しかし、普通にかわいい。正体を知らなければ、一目で付き合いたいと思うレベルだ。
そんなやつが腕を組んできたら・・・思い出すだけで妙な気分。
仕事に身が入らなそうだ・・・

とまぁ、ちょいちょい誘惑して来るアリカはほおっておいて、少し俺たちについて話しておこうと思う。

その前に、
『この物語はフィクションです。登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです。また、下ネタ、グロ系の表現が使われる場合があります。もし、ご覧のみなさまで気分の悪くなる方がいらっしゃいましたら、ブラウザの戻るボタンをクリックしてください』

お決まりのセリフを言ったところで、まずは自己紹介だな。
俺はナイト。名前がナイトだ。職業は剣士。騎士になりたかったが、その職業はなかった。
んでもう一人がアリカ。職業は格闘家。名前が女っぽいのはアレだが、本人がいいなら俺は気にしない。
しかしまぁアリカが女になるなんて、名前の魔力ってやつを信じてしまうな。マジで笑えねぇｗｗｗｗｗｗｗ

おっと。話がそれた。次は世界について。
ここはオンラインゲームＯｚ（オズ）の仮想空間。
人口爆発によって地球上に居住空間がなくなった今、ゲーム世界を永住の地とする人が急増し、それに合わせて各国がＯｚを国政の一部として部分的に買収。それからは全世界はＯｚＯＳによって管理され、人々は現実と同じように仕事、生活をするようになっていった。

肉体は電子情報に変換されゲーム内で思い通りの動きをすることができるし、現実と同じように痛みはある（もちろん死にはしないレベルに設定されているが）。食事だって排泄だって何でもできる。すべてが現実と同様。それがＯｚ社長の目指したこの世界ってなわけだ。
つまりは現実と全く同じと言ってもいい。異世界という言葉がしっくりくる気がする。
でも所詮はオンラインゲーム。サーバーは現実世界にある。サーバーが壊れたら世界は崩壊するわけだが、そうならないようにメンテナンスはするし、バックアップも数百機ほどある。もしもすべてのサーバーが内部から破壊されても、マザーがエラー修復を行うし、外部は各サーバーの自己修復でなんとかなる。

なんでそんなに詳しいかって？
あまり大きな声では言えないが、俺、運営側の人間なんだ。もちろん一緒に行動してるアリカもだ。
ほとんど無職みたいなものだけどな。

昔は、テストプレイとか散々やらされてたんだけど、社長が亡く

なった今は観測されたバグを潰して回るだけだ。
ゲームシステムは社長が勝手に設定してたから、俺たちは内部データの最深部にアクセスすらできない。
おっと、この話はナイショだぞ。これがばれたら、世界の混乱を招いちまう。
まぁばれたところで、やすやすと突破されるようなセキュリティシステムじゃないから、びっくりするほど深刻な問題ではない。

いろいろとずれたが、自己紹介が済んだ所で、今回の事件について少し整理してみようか。

アリカの話だと、違和感を感じて目を覚ましたら、女になってた。ということらしい。
本人は全く原因がわからないらしい。もちろん一緒にいた俺も心当たりはない。

運営サイドとしては、なぜ性別が変わったか。現実の肉体に影響があるのか。それらについて調べ、今後このようなことが起こらないようにすることが、当面の課題か。

とりあえず仕事を終えたら本部にもどるとしよう。
なにかしらの手は打てるはずだ。

アリカと運営役員たちと聖なる双丘と

人ごみの中を歩く。
ここはブリテン王国城下街。世界的に有名な鍛冶師のいる街には、自然と人が集まり、平日でもこの人だかりだ。

今日は彼に用があるわけではなく、俺たちは店の2本手前の道を曲がる。
人通りの少ないこの道をまっすぐ進み、一軒の居酒屋へ。
「あっ。いらっしゃい」
夫婦2人だけで営業するこの店に客はほとんど居ない。
今は昼時。酒を飲みに来る人は少ない。夕方になってくると、サラリーマンたちが疲れを癒しにやってくるのだという。

「今日も飲んでいかないのかい？」
奥さんには申し訳ないが、
「すいません。これから報告にいかないと」
丁寧に断る。
まぁ、暇ができたらおいでよ。と奥さんは言いながら店の奥へと案内する。

トイレへとつながるこの道の突き当たり。男子トイレでもなく、女子トイレでもないこの隙間に入り口はあった。
「それじゃぁまた今度」
旦那さんからビールを2本いただいてしまった。
「彼女さんもまた来てよね。」
あ、はい・・・と彼女は応え、俺たちは闇へと消えた。

株式会社Ｏｚ。ざっくり言うと運営本部。
世界中の王国からつながるショートカットは、本部近くの雑居ビル２階アニメイドＯｚ本店のスタッフルームへとつながっていた。
なぁ。俺はアリカへ問いかける。
「奥さんたちに説明しなくて良かったのかよ」
階段を降り外へ出た俺たちは、まったりと路地を歩く。
「あんまり俺のことを話すと、変な混乱招くかもしれないし」
それもそうだ。アリカも意外と真面目に考えてたんだな。
「でもあの時の『あ・・・はい』は可愛かったぞ。女としてやっていけるんじゃｎ（ｒｙ」
ボディに右が決まった。
もう一発決まる前に、全力で謝る。
その言葉に、素直でよろしい。と気持ち悪いほどの笑顔をアリカは見せると、本部入り口のドアが開く。

ただ、だだっ広いだけの空間がそこにはあった。
相変わらず殺風景だな。どこぞやのリフォームの匠が開放感がなんたら。と言って劇的大改造・・・
この話はやめておこう。

受付にいるＭＯＢのお姉さんに挨拶をし、奥まで進む。
「みなさんが４階でお待ちですので、そちらの方へお願いします」
了解しました。という俺の声に笑顔を返してくれるお姉さん。ん～・・・かわいい。
興奮さめやらぬ中、俺たちはたわいもない話でエレベーター内を過ごし、４階のスタッフ休憩所の扉を開く。

パン！パンパン！

銀やら金やらと、なんかキラキラした紐が俺たちの頭にかかる。
クラッカーとはすぐに気づいたが、ツッコミを入れる前に周りが動いた。

「うぉぉ！すげぇ！」
「本当に女の子になっちゃってる？」

同僚『その１』から『その７』はその場で歓声をあげ、『その８』から『その２０』までは興奮した面持ちでこちらへ寄ってくる。
その内『その１４』の彼は、
「も、も揉んでいいっすか」
指を大きく開いたその手を、緊張のせいか震わせて希望の丘まで近づける。
頂点まであと数センチというところで、アリカの裏拳が決まった。
へぶぅ！というオーバーリアクションとともに大きく吹き飛び、『その８から１２』までが巻き込まれる形となって、衝撃は収まった。軽くネタが入ったとはいえ、この人間ボーリングを目の当たりにすると、やはり敵には回したくはないと思う。
うううう・・・と地面へ突き飛ばされた『その１２』は、怪しくグーパーする右手を掲げて
「男同士ならいいじゃ・・・まいか・・・ガクッ」
と最期の言葉を残し眠りについた。
「男同士でもダメなことはあるのーっ」
アリカは腕を胸を守るようにし、大声をあげる。しかしそれは、完全に男が好むようなポージングとなり、数名が興奮のあまり服を脱ぎ、半裸状態で夕方のランニングへ向かっていった。

興奮したのは彼らだけではない。彼女たち、同僚『その３』、『その４』は手をつないで声を合わせる。
「それじゃぁ、女同士ならいいよね～」
その声に突き動かされたのか、『その１９』は背後からアリカの胸を掴んだ。
むにゅっ。という効果音が聞こえてきそうな指の食い込みは、見ているものを快楽の少し手前まで誘う。
俺はレズビアンというものに一切抵抗がない、むしろカモーン！な感じなので、その光景を脳内メモリに保存しつつ、生暖かい目線をされるがままの胸に注いだ。
「ほうほう・・・これは上玉。くっくっくっ・・・ここがいいのか？」
時代劇の悪代官的なセリフを言いながら、ついにシャツの中へとその手を侵入させる。
「だめっ・・・いやだって・・・いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
その瞬間『その１９』はその場に崩れ落ちた。女性には簡単に手を出さないアリカであったが、今は緊急事態と見たのだろう。後頭部を『その１９』の額に打ち付けたのだった。
一息つくと、紅潮したその頬など気にする素振りは見せず、アリカはシャツの乱れを直す。
しかしまぁ・・・ズレた下着を直すのは誰からも見えないようにしたほうがいいと思うぞ。生き残った男数名が前かがみになっているのがその証拠だ。断じて俺は前かがみにはなっていない。猫背なだけだ。

「茶番は終わりですか？」
奥から大きな樽と上底から現れた人の頭。同僚『その２１』が姿を見せる。

「ったく・・・なんなんだよ。みんなして俺を」
そういうアリカに、樽が底の部分から僅かに足を覗かせて歩み寄る。
「仕方ないですよ。アリカさんは魅力的です。」
その低い身長のため、アリカを見上げるように言った。
いや・・・俺男だし。と頬をさらに赤くさせるアリカ。
不覚にも萌えてしまった。

ごほん。
「なぁ樽。こいつのことなにかわかったんか？」
少し気持ちを落ち着けて俺は問いかけた。
「樽じゃなくて樽田って名前がちゃんとあるんですが。」
『その２１』いや樽田は、空中に出現させたディスプレイを見ながらつぶやく。
これを見てください。と俺達の身長に合わせて、彼にとっては少し高い位置に画面を移動させた。

これは？
どうやらアクセス履歴のようだ。赤い文字で書いてあるところ、不正アクセスか。
「その通りです。ですが御存知の通り、僕達は社長権限を持たないので、不正アクセス扱いとなります。」
「ってことは、内部の人間がやった可能性もあるってこと？」
アリカは画面を凝視したまま聞く。
「そういうことになりますね。ですが、犯人はわかっています。」
・・・ゴクリ。俺にもわかるほどの音を立てて、アリカは樽田の顔を見る。
樽田は一呼吸置き、続ける。
「率直に言います。犯人は・・・」

「アリカさん。あなたですよ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7867x/

Ozの魔法使いと剣士と脚本家と

2011年11月14日03時19分発行